

市内遺跡発掘調査等事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

松倉城墨群発掘調査報告Ⅰ

—富山県魚津市鹿熊地内試掘調査報告—

2002

魚津市教育委員会

序 文

山、川、海に囲まれた自然豊かな地であります、ここ魚津市には、越中三大山城のひとつ松倉城跡があります。その規模は、県内に所在する数ある山城の中でも最大を誇るもので、室町～戦国時代には、幾多の有力武将がこの城を巡って激しい攻防を繰り返していたことは、史料に散見されるところであります。松倉城跡は、本丸部分が県の史跡に指定され、二の丸跡などその他の地区においても埋蔵文化財包蔵地として登録し、その重要性の周知を図ると共に大切に保存されています。

松倉城跡の周辺には、多くの山城（支城）や砦跡が確認されており、松倉城を中心にしてそれを取り囲むように広域な城壁群を形成しています。そのうち、松倉城下の谷あいを流れる角川の流域には、城下町が広がっていたと考えられています。往事は数万人が居住していたとも云われる程の繁栄ぶりと伝えられますが、実態はほとんどわからていません。

魚津市教育委員会では、平成13年度から5ヶ年にわたって松倉城壁群の範囲・実態把握を目的に、国・県の補助を受け、試掘・測量・分布調査を実施していくこととしました。今年度は、推定城下町区域内に所在する、二ヶ所の遺跡内と立地や字名などから候補にあげた計4カ所で試掘調査を行いました。この結果、何れの地区においても、中世期の遺構や遺物が確認され、新たに戦国期の遺構が残る遺跡を発見することができました。

調査対象地であります鹿熊地内では、林道・一般道工事などの開発事業も実施されていることから、本調査事業や報告書が、地域の歴史を解明する一助となるとともに、先人の残した貴重な遺跡を保護するための調整資料となれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして、多大な御協力を頂きました鹿熊地区の方々や関係機関、冬場の調査にあたった作業員の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成14年 3月

魚津市教育委員会

教育長 宮野 高司

例　　言

1. 本書は松倉城墨群範囲確認調査事業のうち、平成13年度に実施した推定城下町区域である、鹿熊地内における試掘調査の概要報告である。

2. 調査は国庫補助事業として、国庫補助金・富山県補助金を受けて、魚津市教育委員会が調査主体となり実施した。

3. 調査事務局は魚津市教育委員会社会教育課に置き、文化係が担当した。調査担当者は、市教育委員会社会教育課学芸員の塩田明弘が行った。発掘作業は社団法人魚津市シルバー人材センターに委託した。

4. 調査期間・対象地・面積は下記のとおりである。

試掘調査期間 平成13年10月25日～平成13年12月19日

遺物整理期間 平成13年12月20日～平成14年3月29日

調査対象地 魚津市鹿熊地内（字林光寺通称ヒヨウタン、ポンヤシキ、三枚田、オヤシキ）

調査面積 260m²

5. 発掘調査現場では、林昭男、田中俊介、岡田幸（以上富山大学考古学研究室学生）の協力を得ている。また出土遺物の整理は、洗浄・注記・実測・拓本作業を（株）中部日本鉱業研究所及び岡田幸、林昭男（以上富山大学学生）の協力を得ている。

6. 報告書作成にあたって、本書の執筆は塩田が担当した。遺構・遺物の実測、拓本、トレース、写真撮影は塩田、岡田、林が行った。

7. 本調査で設定した、水平基準は標高である。なお、図版中の方位は磁北、水平基準は標高を示す。

8. 出土遺物および発掘調査の記録は、すべて魚津市教育委員会が保管している。

9. 調査において、下記の地権者の方々や鹿熊地区々長、地元住民の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）

肥塙和雄・肥塙政雄（以上ポンヤシキ地区）、中田久義・肥塙政雄（以上オヤシキ地区）、道音良治（ヒヨウタン地区）、中田市郎（三枚田地区）

10. 調査期間中及び遺物整理期間中に下記の方々から指導と助言をえている。記して謝意を表したい。（敬称略）

菅沼幸春（地元城郭研究家）、高岡徹（富山県教育委員会）、
前川要（富山大学教授）、宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）

目次

序 文

例 言

I. 位置と環境

1. 位置と自然環境	1
2. 周辺の遺跡について	1
3. 松倉城跡について	3
I. 調査の経緯	
1. 調査にいたる経緯	3
2. 調査の方法	6
II. 調査の概要	
1. ボンヤシキ地区	6
2. オヤシキ地区	7
3. ヒョウタン地区	7
4. 三枚田地区	15
III. 調査のまとめ	
1. 各調査区のまとめ	17
2. まとめと次年度の調査予定	18
図版	
子 真	20

写 真 図



I. 位置と環境

1. 位置と自然環境

魚津市は、富山県の東部中央から北東端部に位置する。市内には、滑川市との境をなす早月川、黒部市との境である布施川の他に、毛勝山から流れる急流河川である片貝川や、角川が貫流する。魚津市の地形は、立山連峰剣岳から毛勝山、僧ヶ岳へと連なる山岳地帯とその前山を成す丘陵地帯、台地と平野部を構成する扇状地帯で構成される。市の平野部は僅かで、発達した洪積台地は河川によって形成された河岸段丘が顕著に見られる。

松倉城跡やその支城と考えられる水尾城跡や升方城跡など多数の山城や砦は、山麓丘陵地上に立地し、この丘陵地は主に凝灰岩や泥岩などで構成される。松倉城跡の所在する城山の麓には城下町があつたとされる鹿熊地区が、谷あいを流れる角川の流域及び丘陵地帯に広がっている。現在この地域は、宅地と圃場整備の行われた整然とした水田、森林で占められる。鹿熊地内を貫流する角川は、早月川と片貝川の分水嶺付近に水源をもつ河川で、中流域には宮津など港の所在を想起させる地名が残る。このことは、松倉城跡やその周辺の調査などで中国製の磁器や多数の国産陶磁器が見つかっているが、その運搬に角川の水運を使用していたとも考えられる。時代は下るが、角川の河口付近には、江戸時代に建設された石造りの灯台が設置されている。北前船などの寄港地として、角川尻が活発な日本海交易における湊として繁栄していたことを示すものとして、市の史跡に指定されている。

2. 周辺の遺跡について

松倉城跡周辺には多くの山城や砦跡の他に、城館や寺院、町屋があった城下町が存在していた。こうした松倉城を中心とした支城・城下町の広域的な拡張性と有機的な繋がりを「松倉城壁群」と位置づけている〔魚津市史編委1968〕。このため周知の遺跡は、中世から近世にかけての遺跡が集中し、古代以前は確認されていない。但し昭和53年に行われた圃場整備工事時に出土した資料や過去の発掘調査の出土品の中に古代の須恵器が確認されており、今後詳細な分布調査などで概期の遺跡が発見されるかもしれない。

松倉城跡の南西、角川を挟んだ早月川右岸の丘陵上には水尾城跡が位置する。水尾城跡よりさらに南東700m程の地点に水尾南城跡がある。水尾城跡から北西へ尾根づたいに700m程には南升方城跡、約1.5kmに升方城跡が位置する。水尾城跡と南升方城跡の中程には、城下への大手と推定される石組遺構である石の門がその威容を誇っている。これらの遺跡は、富山市方面（西側）に対する一連の防衛線として松倉城の前線基地としての役目を担っていたものと推定できる。また角川右岸松倉城跡のある城山の麓を見ると、領主や家臣の屋敷跡と推定される、鹿熊オヤシキ遺跡や小菅沼武家屋敷跡（通称武隈屋敷跡）などがある。また寺院跡と推定される淋光寺遺跡や堅固な土塁に囲まれた平坦面をもつ鹿熊ホーエン遺跡、松倉城跡の北側、鹿熊集落の入口にあたる箇所には焼山砦が形成されている。さらにつく上に示すことが出来なかつたが、松倉城跡から南東3～5kmの山中には金山跡が確認されており、多数の支城や堅固な城郭の形成、城下町の繁栄にこの金山での資金力が関わっていたことは十分考えられる。

今年度の試掘調査対象地は全て水田で、鹿熊オヤシキ遺跡内と淋光寺遺跡内、鹿熊ホーエン遺跡から北へ40m程の砦状に突き出た台地上（通称三枚田）である（第2図参照）。



第1図 松倉城跡周辺図 ($S = 1/10,000$)

1. 松倉城跡
2. 小菅沼A城跡
3. 小菅沼神社（城館跡）
4. 小菅沼武家屋敷跡
5. 燐山砦
6. 鹿熊オヤシキ遺跡
7. 淋光寺遺跡
8. 鹿熊ホーエン遺跡
9. 升方城跡
10. 鹿熊城殿遺跡
11. 南升方遺跡
12. 石の門砦
13. 水尾城跡

3. 松倉城跡について

松倉城跡は魚津市の南西部、鹿熊字城山（標高約430m）に位置する。増山城跡（砺波市）・守山城跡（高岡市）とともに「越中の三大山城」としてその名を知られ、本丸部分（面積約3,600m²）は県の史跡に指定されている。城は南北に細長い尾根を空堀で区切り、複数の郭（山輪）を連続して設けた連郭式山城である。南北約250mの長さに整然と並ぶ主要な5つの郭（本丸・二の丸、三の丸、四の丸）の周辺には多数の削平地や土塁、空堀などが確認できる。特に本丸から城山中腹の大見城平に至るまで、館跡と見られる平坦面や土塁、砦状の造構が数多く見られる。南端の本丸は標高418m、北端のろし台は標高430mを測り、本丸からのろし台までの距離は約800m、大見城平を含めると150,000m²近い、県最大の巨大な城郭である。城の三方（東南西）は急斜面の絶壁で、その周辺は升方城・水尾城・水尾南城・北山城（金山城）・坪野城など多くの支城に囲まれた、まさに天然の要害であった。築城の時期は明らかではないが、南北朝期の14世紀前半には越中における主要な山城として史料に散見することから鎌倉時代の築城が推定される。15世紀には越中守護である畠山氏の守護代として、椎名氏が新川地区（富山県東部）を治めることとなり、代々椎名氏が城主をつとめた。椎名氏は越後の長尾（上杉）氏に属し、新川地区での勢力を強めていくが、永禄11（1568）年、越後上杉氏からの自立を図り、椎名康胤は武田信玄と結んだことから上杉謙信に攻められ、翌年落城。以後魚津城とともに上杉方の越中における拠点として、重臣の河田長親を置き新川郡の統治にあたる。その後次第に政治・軍事の拠点が魚津城に移ることとなり、天正11（1583）年、織田方の佐々成政の攻撃により、魚津城とともに落城する。成政転封後は前田氏の所領となつたが、慶長午間の初め（16世紀末頃）に至り廃城になったといわれている。

このように松倉城跡は新川地区における政治・経済・軍事の拠点として、この城を巡る攻防が、魚津の中世史を語る上で重要な位置を占めている。

II. 調査の経緯と方法

1. 調査にいたる経緯

松倉城跡に関する調査は、地元郷土史家や城郭研究者の方々によって精力的に行われており、詳細な縦張図や測量図、古い字名の記録などが作成されている。魚津市教育委員会では、平成4年度から7年度にかけて、国庫補助事業として松倉城跡範囲確認調査を実施した。これは、松倉城跡の詳細な地形測量図と考古学的調査による造構の範囲や年代を特定することを目的としたものである。試掘調査では、本丸と二の丸間の空堀の堆積状況や建築年代の推定、城山中腹にある平坦面（大見城平）の造成時期などが確認された〔魚津市教委1999〕。しかし広大な山城において、調査成果はその一端を示すものであり、更なる継続的な調査が期待されていた。

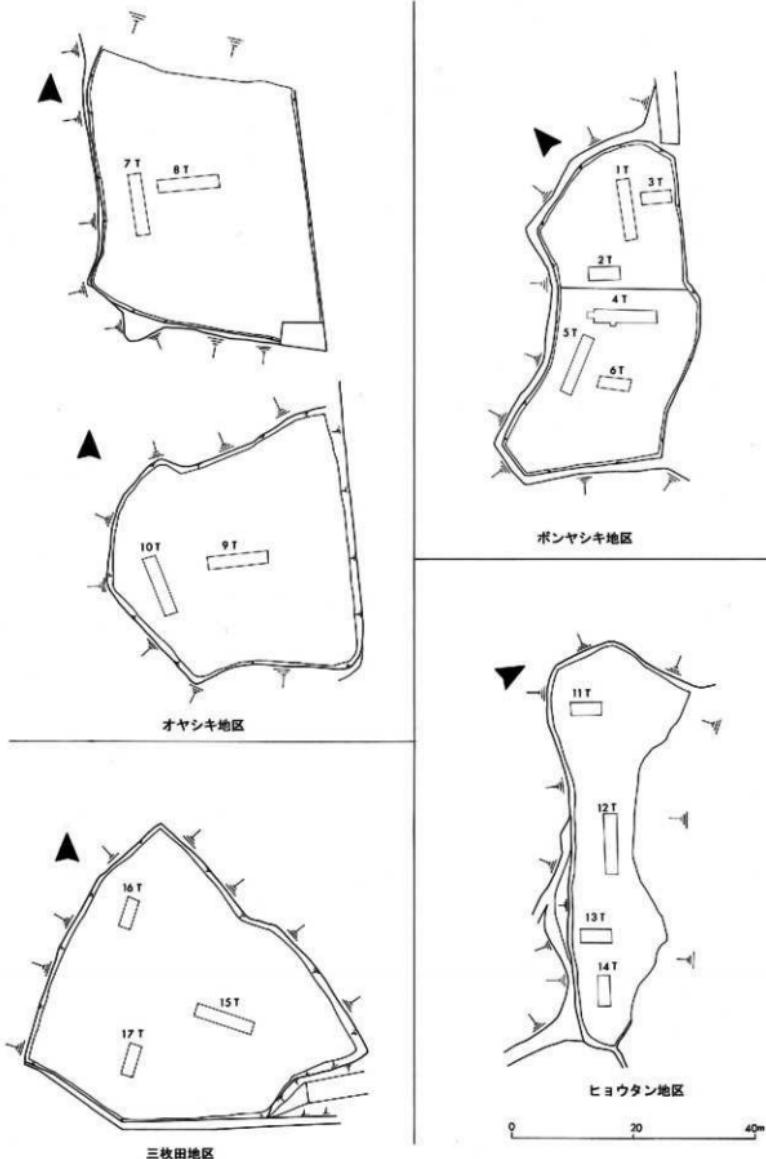
市教委ではこれまでの調査・研究をもとに、松倉城単独ではなく、周辺に点在する山城・砦（支城）や城下町（居館・寺院・町屋）を含めた造構の範囲や遺存状況の把握、実態解明を目的に、平成13年度から平成17年度までの5ヶ年による松倉城邑群範囲確認調査事業が行われることになった。

平成13年度の調査では、推定城下町区域である鹿熊地内での試掘調査を行うこととした。ところで、松倉城城下町が抜がっていたとされる鹿熊地区一帯は、昭和53年に大規模な圃場整備が実施されている。しかし事前の発掘調査が行われずに工事が施工されたため、遺跡の範囲や実態はほとんどわかつわかっていない。圃場整備工事中に、地元の一部の方々によって大量の中世土師器皿や国産陶磁器、



第2図 試掘調査対象地区と周辺遺跡範囲 ($S=1/2,500$)
 (スクリートーンによる網掛部分)

1. 鹿熊オヤシキ遺跡 2. 淋光寺遺跡 3. 鹿熊ホーエン遺跡



第3図 試掘調査対象地区とトレーンチ位置図 (S=1/800)

中国製磁器や漆器、刀の鍔などが採集されており、大半の遺物採取地であるオヤシキ地内（鹿熊オヤシキ遺跡）は、出土遺物や柵場整備前の地形測量図、字名などから領主の居館跡と推定されている。この他にも寺院や屋敷跡を想起させる字名などが多く見受けられる。

2. 調査の方法

調査地の選定は、1) 柵場整備による掘削の影響が少ないと思定される地点、2) 付近で中世期の遺物が採集された地点、3) 字名や水田の通称名によって何らかの遺構が検出されると考えられる地点、などを勘案して調査候補地とした。候補地は城郭研究者や地元鹿熊地区の方々の意見を基に、地権者の同意が得られた箇所に選定した。

発掘調査は1つの水田に対して幅2m、長さ5mもしくは10mのトレンチを2~4ヶ所設定した。最終的に計17ヶ所のトレンチ、約260m²の発掘面積となった。過去の調査データが皆無であるため掘削深度の予測は困難であったが、地権者の希望もあり掘削作業は重機類を使用せず、人力にて行った。掘削は耕土及び床土を除去し、層位を確認しながら遺構検出面もしくは地山上面まで行った。掘削作業の終了したトレンチから層位図と平面図を作成し、併せて調査区全体の概略地形図の作成を行い記録に努めた。出土遺物は原則、平面図に出土地点とレベルを記入し、層位ごとに取り上げた。

調査中は地元鹿熊地区的住民や学校関係者の方々の見学があり、関心の高さが伺えた。

調査終了後は、翌年の農作業に影響がない様に現状復旧作業を伴った埋め戻しを行った。具体的には、掘削箇所での耕作機の沈下を防ぐため、耕作土を埋め戻す前に碎石を敷き転圧機による地盤の強化を図った。但し、耕作土のみの掘削地点はこの限りではない。

III. 調査の概要

1. ポンヤシキ地区（1~6T）

①位置と層位 調査対象地区は淋光寺遺跡内西側、城山丘陵裾部より派生した丘陵の末端にある。鹿熊集落を見渡し、角川を挟み舟方城跡と対峙する位置にある。標高は約98mを測る。砕状に突き出した上部平坦面、1,110m²に、トレンチを6箇所（約90m²）設定した。本地区の層序は耕作土（暗茶褐色粘質土）と床土（灰色粘質土）を除去すると、地山である黄白色粘質土層の上面が検出された。各トレンチより地山上面にて径10~20cm程の礫が定量認められた。遺物包含層は柵場整備時に削平を受けたものと考えられ、確認できなかった。

②遺構 1トレンチ（以下T）では、SX1~6の掘り込みが検出された。SX1~3は、若干の堆積土が認められる浅い掘り込みである。SX4は一部深掘りを行ったが、遺物は全く出土せず、自然堆積とも思える。SX5の覆土は緑灰色の粘土質で水が溜まっていたと考えられる層位を示す。

2Tでは径10~15cm程の小礫と径25cmの平坦な石が60cm間隔で据えられていた。小規模な建物の根石・礎石とも推察できるが、遺物が全く出土しておらず、時期の特定ができない。

3Tは溝と掘り込み（SX7）を検出した。地山上面より15世紀後半の土師器皿（5）、溝覆土上面より、16末~17世紀初頭にあたる越中漸戸皿（6）が出土した。

4Tは上坑（SK1）と掘り込み（SX8）を検出した。SX8の覆土は礫を多量に含む緑灰色粘質土で水が溜まっていた層位と考えられる。礫の中には径20~30cmの平坦な石が2個認められ、礎石と推定しその延長上を拡張したが、石列は確認できなかった。

5Tは地山面である3層上面において、礎石と思われる径約30cmの平坦な石を2個検出した。同一

レベルで掘削・精査するが、続きの石は確認できず、多量の礫層が検出された。

6 T は遺構・遺物は検出されなかった。酸化鉄・マンガン質を含む4~7層は斜状に互層を成し堆積している。

③遺物 1 T からは、地山直上より越中瀬戸小壺(3)及び火箸(1、2)、廃土で16末~17世紀初頭の越中瀬戸皿(4)が、4 T の耕作土から16世紀前半の端反りの白磁皿(7)が出土した。

2. オヤシキ地区 (7~10T)

①位置と層位 調査対象地区は鹿熊オヤシキ遺跡内西端、鹿熊集落に程近く、集落を見下ろす高位段丘上に位置する。標高は約82mを測り、ふもと集落との比高差は約16mである。前述した居館跡と推定される場所は調査地区より北へ70m程の方形区画を呈していた水田であったが、現在はその様子を伺い知ることはできない。当初館付近での調査を検討していたが、3 m以上の削平や盛土工事を行っているため、調査予定区から外した。今年度の対象地は、推定期間の前衛部にあたり明治初期の地籍図から現在まで地形の改変を受けていないと想定される南北に並ぶ2箇所の水田、2,573m²を選定した。それぞれ2ヶ所ずつ計4ヶ所(約80m²)のトレンチを設定した。層位は、耕土(暗茶褐色粘質土)と床土(灰色粘質土)を除くと灰色粘質土層、明褐色粘質土層、明赤褐色粘質土層、黄灰色粘質土層が認められ、遺物包含層・遺構検出面が確認された。

②遺構 調査の結果2枚の水田のうち南側(9・10T)は、地山自体が現代の搅乱によって削平を受けていた。従って搅乱層より多くの中世遺物が出土したが、遺構の検出は不可能であった。北側部分では特に7 Tで良好に遺構・遺物が遺存していることが確認できた。

7 T は礫石と考えられる径25cm程の平坦な石が約2.2mの間隔で据えられていた。石3の西側70cmの地点にある石4は1辺15cmの方形に整形したものである。他に土坑が6基、溝1基、掘り込み(S X 1)を検出した。覆土は暗灰黄褐色粘質土で炭化物を多量に含む。特に7 Tの北側で、覆土全面炭化物で覆われたSK 6やその周辺では炭化物や焼土が認められた。S X 1は一部試し掘りを行ったが、遺物は出土しなかった。

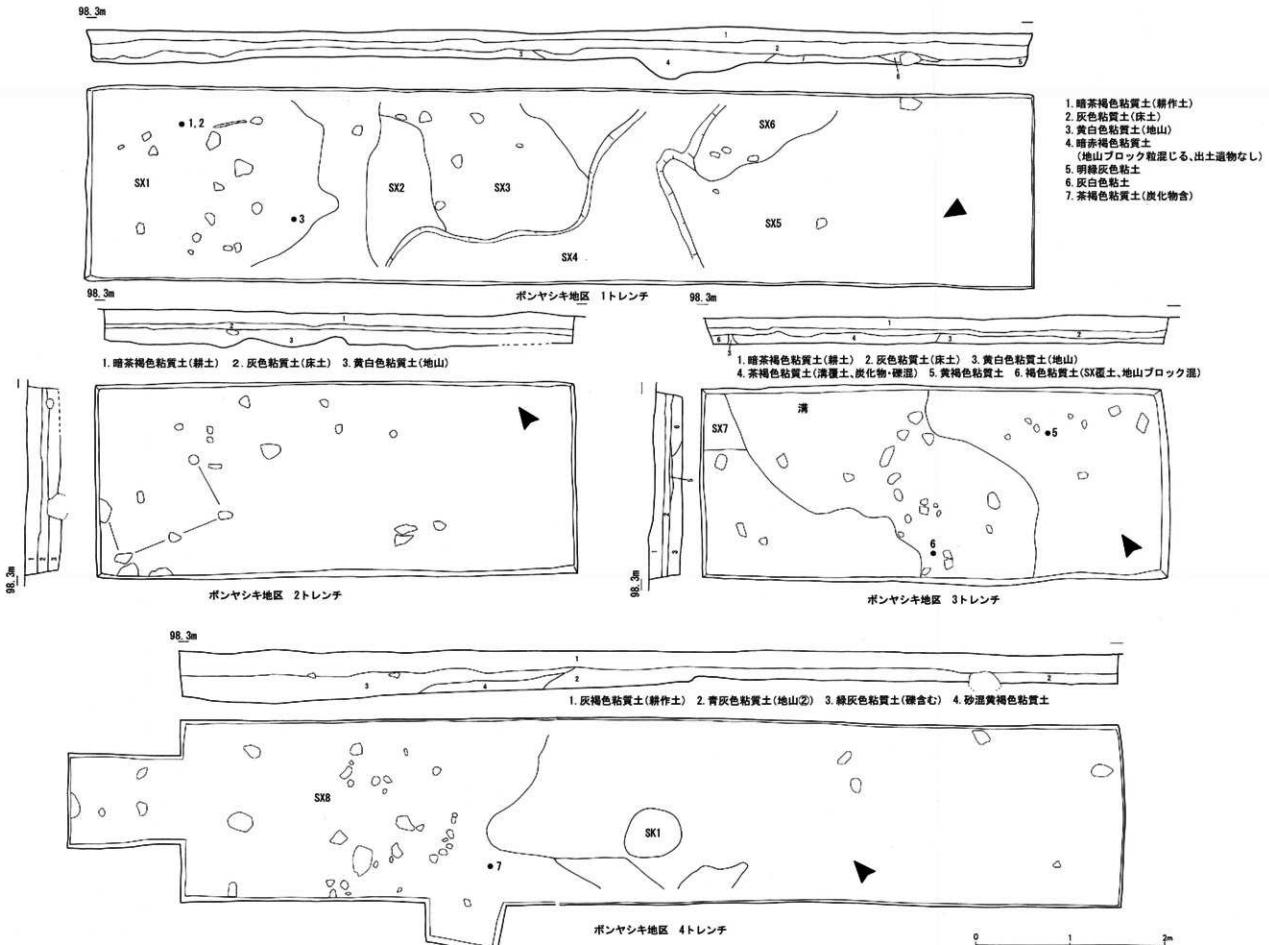
8 T では、2層(灰色粘質土層)上面で炭化材・炭化物片が密集して検出され、付近では15世紀後半の土師器皿(14)と珠洲片(26)も出土している。8 T の西側端では、長径40cm、短径15cmの扁平な石が検出され、7 T で確認した礫石列と直交する位置にあり礫石建物跡の可能性が高い。8 T 東側の耕土直下に排水用と思われる竹等の木片をもちいた暗渠があったが、所属時期は不明である。

③遺物 7 T は、遺構検出面から炭化物・焼土と共に砥石(13)が出土した。4層からは土師器皿(9)、5層で土師器皿(8)・珠洲片(12)、6層より土師器皿(11)が出土しており、いずれも15世紀後半に位置付けられる。16世紀前半の10は廃土から採取した。遺構面直上の5、6層は中世~近世の包含層と考えられる。8 T の2層からは15世紀後半~16世紀代にいたる土師器皿(15~23)の他に越前・信楽・越中瀬戸鉄釉皿(24)が出土した。採取した炭化材の中には炭化米も含まれていた。

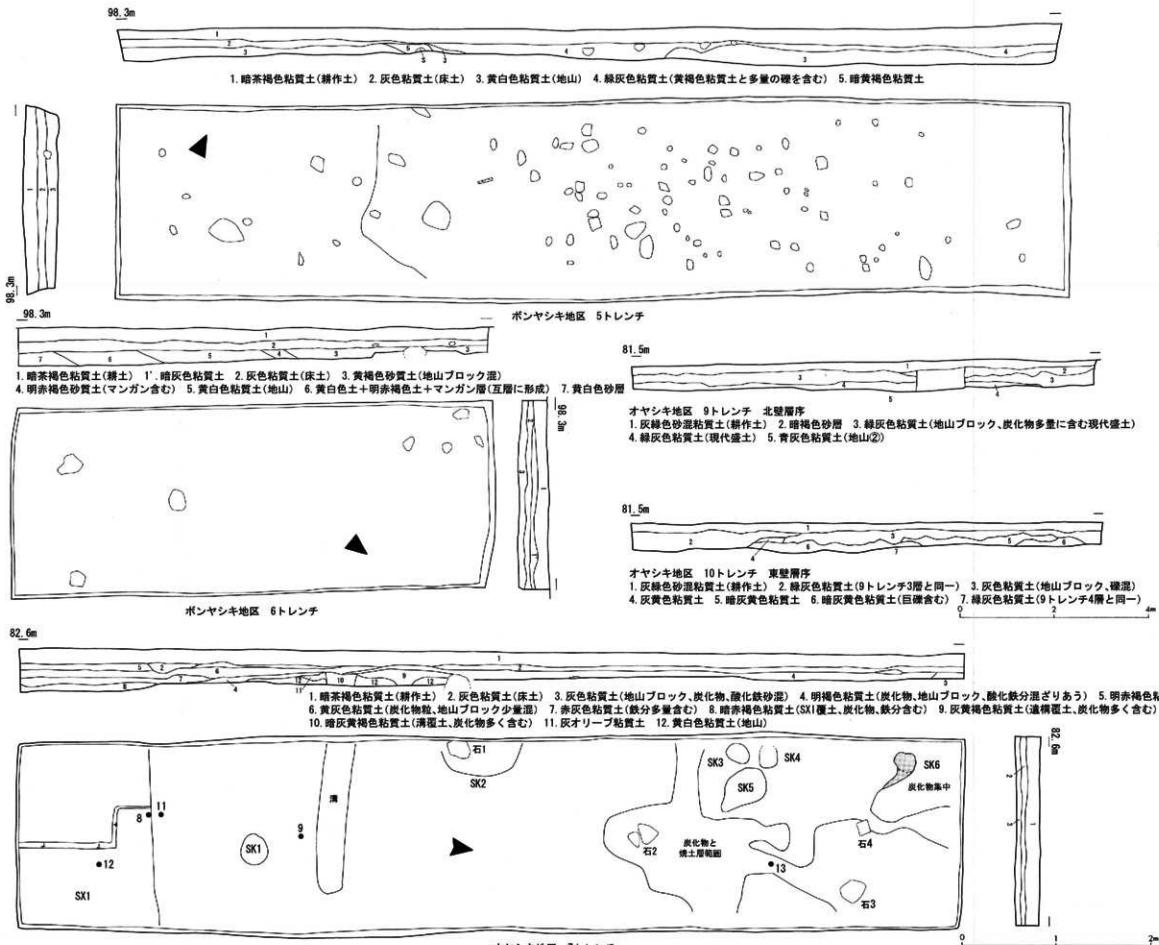
9・10 T では16世紀前半の土師器皿(27、28)、16世紀後半の越前壺(30)と珠洲片(29)を盛土より採取した。

3. ヒヨウタン地区 (11~14T)

①位置と層位 調査地区は淋光寺遺跡内中央南側、ポンヤシキ地区と同じ丘陵上に位置する。標高は約114mを測り、ポンヤシキ地区を見下ろす位置にあり、その比高差は約16mである。中央部がくびれた瓢箪形を呈する水田約1,000m²にトレンチを4箇所(約50m²)設定した。調査地区的南東側には幾つもの小規模な平坦面が段状に連なり、このうちの一角から過去に越前焼の壺片が出土しており、

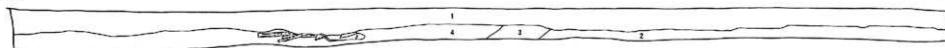


第4図 試掘調査箇所層位・平面図① (S = 1/40)

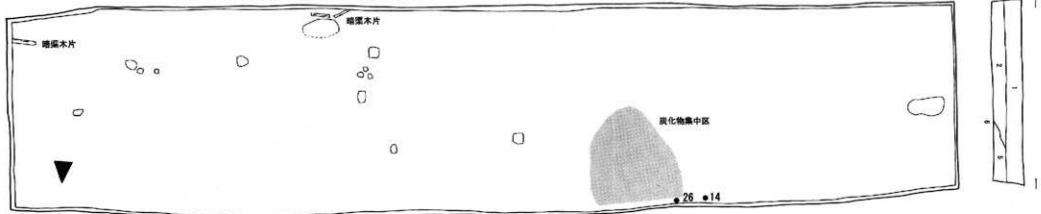


第5図 試掘調査箇所層位・平面図② (9・10T層位図はS=1/80、他は1/40)

82.5m



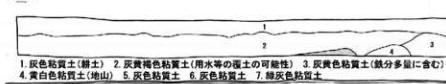
1. 暗茶褐色粘質土(耕作土)
2. 灰色砂混粘質土(地山ブロック、鐵化鉄分混じり)
3. 灰黃褐色粘質土(炭化物多く含む)
4. 青灰色粘土
5. 緑灰色粘質土(炭化物含む)
6. 黄白色粘質土(地山)



114.5m

オヤシキ地区 8トレンチ

114.5m

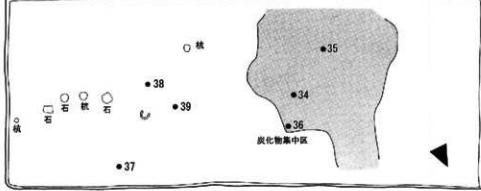


1. 灰色粘質土(耕土)
2. 明緑灰色粘質土(鉄分含む)
3. 黄白色粘土(鉄分、炭化物含む)
4. 灰褐色粘土(炭化物、礫合む)
5. 黄白色粘土(鉄分、マンガン、炭化物多く含む)
6. 灰綠色粘質土(鉄分、炭化物多量に含む)

炭化物集中区 (Zone of high carbonization)

- 32
- 33
- 31

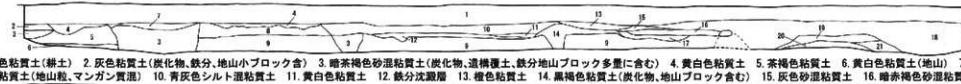
ヒヨウタン地区 13トレンチ



114.5m

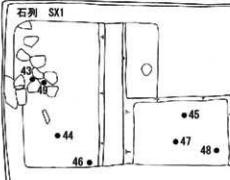
ヒヨウタン地区 14トレンチ

106.7m

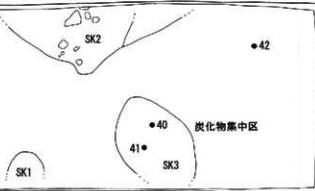


1. 暗緑灰色粘質土(耕土)
2. 灰色粘質土(炭化物、鉄分、地山小ブロック含む)
3. 暗茶褐色砂混粘質土(炭化物、遺構覆土、鉄分地山ブロック多量に含む)
4. 黄白色粘土
5. 茶褐色粘質土
6. 黄白色粘質土(地山)
7. 鐵化鉄分沈澱層
8. 締黄褐色粘質土
9. 灰褐色粘質土(地山粒、マンガン混在)
10. 青灰色シルト混粘質土
11. 黄白色粘土
12. 鉄分沈澱層
13. 緑色粘土
14. 黑褐色粘質土(炭化物、地山ブロック含む)
15. 灰色砂混粘質土
16. 締赤褐色砂混粘質土
17. 黄灰色粘質土
18. 灰茶褐色シルト粘質土
19. 締褐色粘質土
20. 赤褐色砂質土
21. 締赤褐色砂混粘質土(地山ブロック混在)

石列 SX1

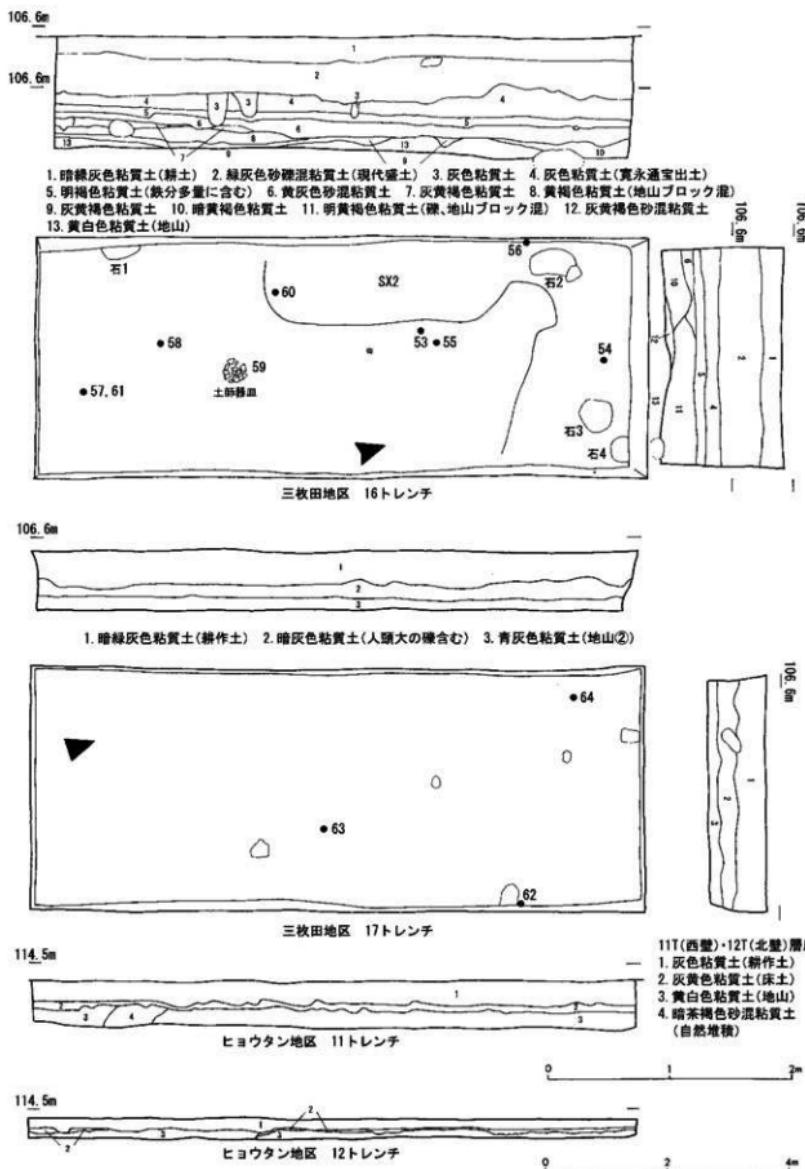


三枚田地区 15トレンチ



0 1 2m

第6図 試験調査箇所層位・平面図③ (S = 1/40)



第7図 試掘調査箇所・平面図④ (12丁のS=1/800)

概期の造成と推定できる。本調査区の造成時期も同様であるかの検証を行う目的で調査を実施した。層位は調査区の北西側と南東側で全く異なり遺構の有無も同様であった。北西側では耕作土（灰色粘質土）・床土（灰黄色粘質土）を除くと地山面（黄白色粘質土）が認められた。南東側では耕土下は各トレンチで異なる。

②遺構 11・12Tでは出土遺物も遺構も検出されなかった。なお11Tの4層は遺構覆土と考えるより周囲の状況や土質などから自然堆積によると思われる。この土層はポンヤシキ地区の1T・S X 4の覆土と酷似している。

13Tは5層上面にて炭化物の集中する箇所が検出された。南側は水が溜まっていたと考えられる4層が遺構検出面（5層）を覆うように堆積していた。4層及び5層上面にて土師器皿が出土した。

14Tは耕土を除去すると炭化物が集中的に不整円形に拡がっている箇所が検出された。覆土上面から15世紀後半～16世紀初頭にあたる土師器皿（34、35）、越前甕片、16世紀末頃の越中瀬戸皿（36）が出土している。14T西側で杭列や石を含む2層が検出されたが、この土層は用水などの覆土と考えられる。時期は馬の蹄鉄の出土からも近現代と思われる。

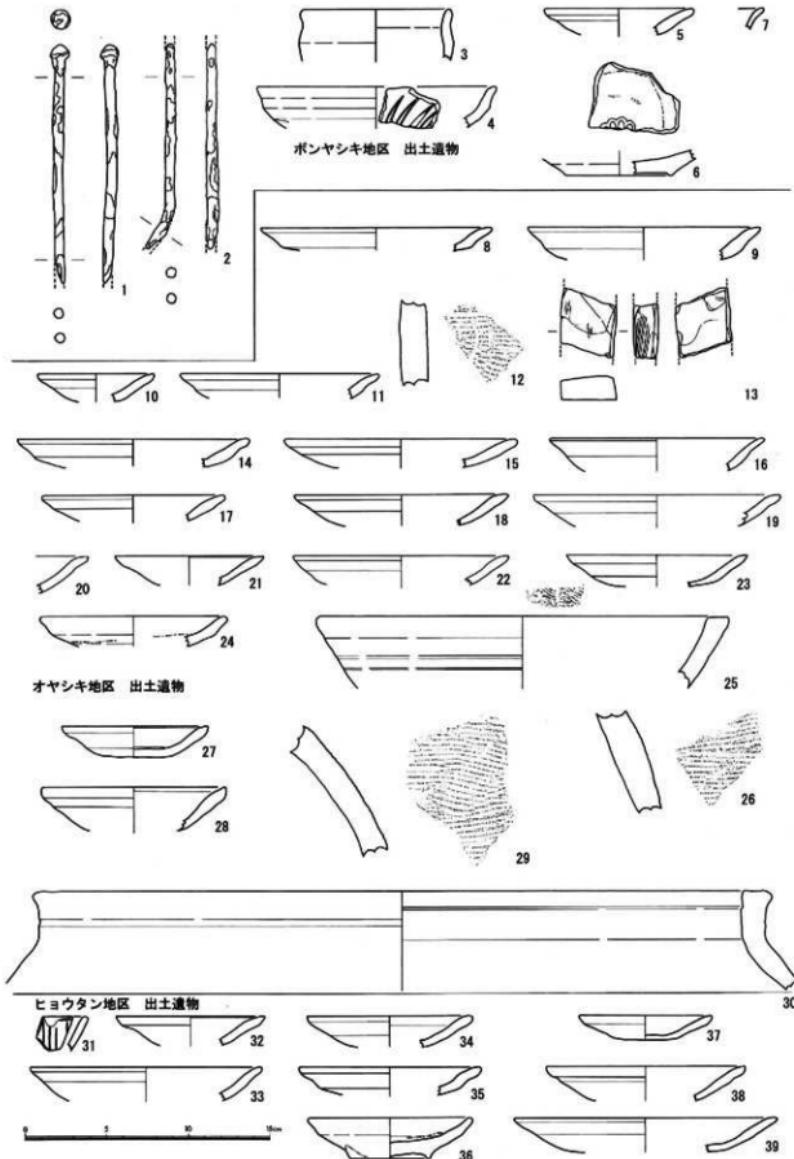
③遺物 13Tの4層からは、被熟した16世紀前半の線刻蓮弁文の青磁碗（31）、15世紀後半の土師器皿（33）、5層上面では16世紀後半の土師器皿（32）が、14Tの2層より15世紀後半から16世紀前半の土師器皿（37～39）がそれぞれ出土した。

4. 三枚田地区（15～17T）

①位置と層位 調査対象地区は城山丘陵の裾部末端にあり、三角形に突き出た丘陵上に位置する。標高は約107mを測る。ポンヤシキ地区等を含む淋光寺遺跡とは、谷を境に對峙する地点にある。土塁に囲まれた平坦面を持つ鹿熊ホーエン遺跡より北へ50m程下った地点で、その比高差は約13mを測る。1,538m²の水田にトレンチを3箇所（約40m²）を設定した。本地区的層序は地点によって異なる。調査地の西側は圃場整備時に盛土を行っているため、耕作土（暗緑灰色粘質土層）・盛土（緑灰色粘質土層）を除くと旧耕作土（灰色粘質土層）があり、その下層に中世期の遺物包含層及び遺構面が良好に残されていた。調査地の東側は削平を受けているが、遺物包含層や遺構面を確認できた。

②遺構 15Tでは、耕土下に堆積した酸化鉄分の沈殿層（7・12層）や鉄分を含んだ粘質土層（16層）直下より遺構の掘り込みが認められた。15Tの東側は土層の堆積が一定でなく、人為的な改変が行われているようである。遺構は土坑が3基、掘り込み（S X 1）1基が検出された。SK 1の覆土は黄白色粘質土でマンガン質や地山ブロックを含む。SK 2は16層が覆土上面で、径10～20cmの小礫を含む。SK 3の覆土は緑灰色粘質土で、多量の炭化材や炭化物と共に15世紀後半～16世紀初頭の土師器皿（40、41）が出土した。15T東側のS X 1からは径15cm程の石を南北方向に敷設した石列が検出された。覆土の3層（暗茶褐色粘質土層）から、炭化材や多量の炭化物とともに中世土師器皿が出土した。

16Tでは旧耕作土と考えられる4層（灰色粘質土層）を除去すると、5層以下大量の中世土師器皿片がトレンチ全体から出土した。第7図にあるように、トレンチ中央南寄りの遺構面（地山直上）から15世紀後半と思われる上師器皿（59）が正置の状態で検出された。上圧で潰れたと考えられ、一部破片を欠くがほぼ復元できるものである。またトレンチ内で礎石と推定される平坦な石が4個検出されている。但し、石1は他の石の上面と比して約20cmのレベル差があり、また石3は、凝灰岩質で移植ごてで削ることができる軟質であることから礎石の機能を有していたのかや疑問が残る。石2・4を結ぶ軸はほぼ南北方向で、石列間は約1.6mを測る。



第8図 出土遺物実測図① (S=1/3)

17Tは耕作土除去後、2層（暗灰色粘質土層）より人頭大の円礫や凝灰岩質の軟石、15世紀後半の土師器皿（62、63）や16世紀後半の白磁皿（64）、17世紀の越中瀬戸皿が出土した。地山上面にて精査を行ったが、石以外に遺構は確認できなかった。

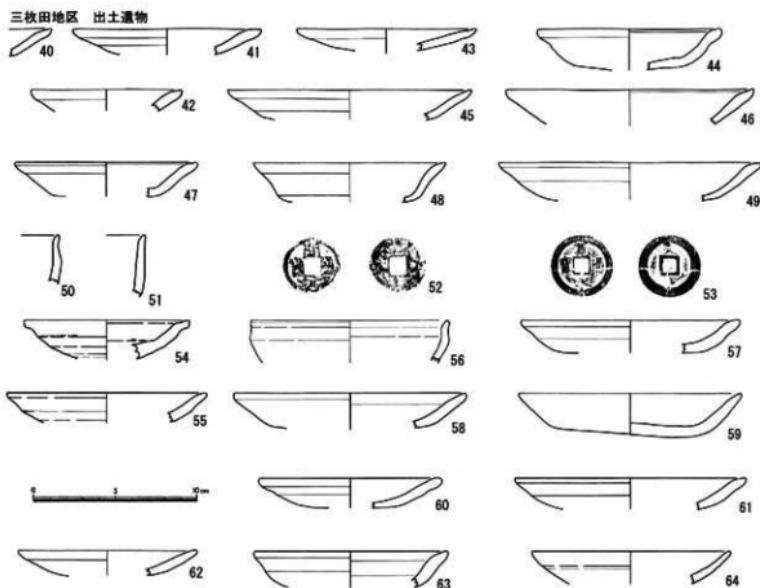
③遺物 15TのS X 1の石列覆土及び近隣の埋土は15世紀後半の土師器皿（43～46）と16世紀前半にあたるもの（47、48）が主体を成す。石列覆土には16世紀後半にあたる49が1点見られるが、混入の可能性もある。他に15Tの東壁付近より16世紀後半の瀬戸美濃天目茶碗（50）が出土した。

16Tは2層盛土から開元通宝（52）、4層から寛永通宝（53）と大窯期の越中瀬戸灰釉皿（55）、5層より16世紀末の越中瀬戸天目茶碗（51）と灰釉皿（54）、6層から16世紀後半の瀬戸美濃天目茶碗（56）と土師器皿（61）、15世紀後半の土師器皿（57）、遺構面（地山直上）より15世紀後半のロクロ土師器皿（58）や16世紀初頭の土師器皿（60）がそれぞれ出土している。59はロクロ土師器の口縁形態をとるが、器形全体の歪みなどから手づくねと推察される。底部外面は不定方向にヘラケズリを行うが器面は均一になっていない。類例を待ちたい遺物である。

IV. 調査のまとめ

1. 各調査地区のまとめ

ポンヤシキ地区は、遺物包含層が削平されていることから出土遺物で遺跡の性格を考えることは難



第9図 出土遺物実測図② (S = 1/3、銭貨は1/2)

しい。遺構からは、小規模な建物跡の存在が推定できる。

オヤシキ地区は、南側の水田は後世の攪乱掘削によって遺構面は存在しない。但し盛土土層中には中世期の遺物が定量含まれる。北側の水田は中世期の遺構・遺物包含層が残る。特に西側崖付近には礎石建物跡が存在していた可能性がある。

ヒヨウタン地区の北側部分は遺構・遺物ともに確認出来なかった。これに対し南側部分は中世期の遺物が定量出土している。調査区南側近隣の連続した平坦面が戦国期の造成と推定できることから、北側部分は後世の造成により、南側部分は戦国期に形成された平坦面と推察される。

三枚田地区は礎石建物跡を推定させる石列や炭化物を含んだ性格不明の石列など、いずれも中世期の遺構・遺物が良好に確認できた。この地区は周知の遺跡として認識されておらず、今回の調査で新たに確認できたことは大きな成果といえる。多量に出土した土師器皿片はこの地区において、それを使用する酒宴や儀式が催されていたことが想定され、領主居館跡とも推定されているオヤシキ遺跡を見下ろす立地は、寺院の存在もしくは居館跡の変遷・再考などを考える上でも重要な箇所といえよう。

2.まとめと次年度の調査予定地区

今年度の調査によって、剛場整備後の鹿熊地区の一端が確認できた。各調査地区において量の多少はあるが、室町～戦国時代の遺構・遺物が確認された。特にオヤシキ地区や三枚田地区では、礎石建物跡とも推定できる、石列を検出した。また各調査地区より検出された炭化材や炭化物片の検出は火災にあったことを示すものと推定される。但し、史料には上杉勢や織田勢らの攻撃を受け城下一帯が焼失したことが記されているが、調査地区において広範囲に焼土層や被熱した土器・陶磁器は確認されていない。過去に採集された鹿熊オヤシキ遺跡出土遺物を見ても被熱したものは極僅かである。このことから、城下一帯を焼き尽くす火災ではなく、局所的な火災であったことが考えられる。

出土遺物は中世土師器皿の他に、白磁や青磁、瀬戸美濃、珠洲、越前などで15世紀後半～16世紀代が主体を成し、越中瀬戸など一部近世が混じる。そのうち土師器皿は、全出土遺物破片数688点のうち、616点で、約9割と大半を占める。このことは、15～16世紀代の城館・寺院の出土遺物組成と似た特徴を示すものである [北陸中土器研1991]。

次年度は三枚田地区と近接する鹿熊ホーエン遺跡周辺の地形測量及び試掘調査を行い、遺構・遺物の把握、遺跡の性格の推定、三枚田地区・鹿熊集落との関連性などを調査する予定である。

引用・参考文献

- 魚津市史編纂委員会 1968 『魚津市史上巻』
" 1982 『魚津市史史料編』
魚津市教育センター 1982 『魚津の自然』
魚津市教育委員会 1996 『魚津の文化財』
新人物往来社 1980 『日本城郭大系 7』
高橋成計 1992 『越中松倉城跡群の考察』『越中の中世城郭第2号』富山の城を考える会
砺波市教育委員会 1998 『増山城跡 I』
" 1999 『増山城跡 II』
平凡社 1994 『富山県の地名』
北陸中世土器研究会 1991 『城館遺跡出土の土器・陶磁器』
麻柄一志・塩田明弘 1999 『魚津市松倉城跡の試掘調査』『魚津市立博物館紀要第5号』魚津市教育委員会





三枚田地区より鹿熊集落を望む



三枚田地区よりポンヤシキ地区を望む



ポンヤシキ地区近景



ポンヤシキ地区近景（東より）



オヤシキ地区（北側）調査風景（西より）



オヤシキ地区（南側）調査風景（東より）



ヒョウタン地区調査風景（西より）



三枚田地区調査風景（東より）



1 T (ボンヤシキ地区) 遺構検出状況（西より）



4 T (ボンヤシキ地区) 遺構検出状況（東より）



2 T (ボンヤシキ地区) 遺構(建物跡か)検出状況
(東より)



2 T (西より)



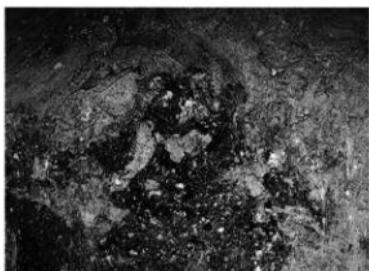
11 T (ヒョウタン地区) (南より)



13 T (ヒョウタン地区) (北より)



14 T (ヒョウタン地区) (西より)



14 T 炭化物集中区出土の中世土師器



7T（オヤシキ地区）遺構検出状況（北より）



同（南より）



7T礫石付近（東より）



7T溝検出状況（東より）



7T炭化物検出状況



7T石出土状況



15T（三枚田地区）石列検出状況（東より）



同（北より）



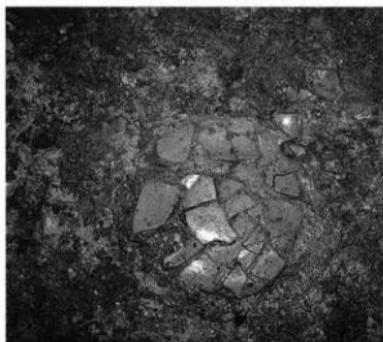
15T SK3 検出状況（東より）



16T（三枚田地区）調査風景



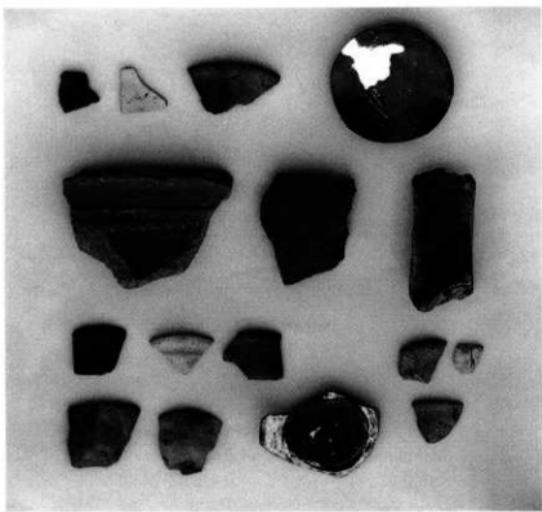
16T層序（南より）



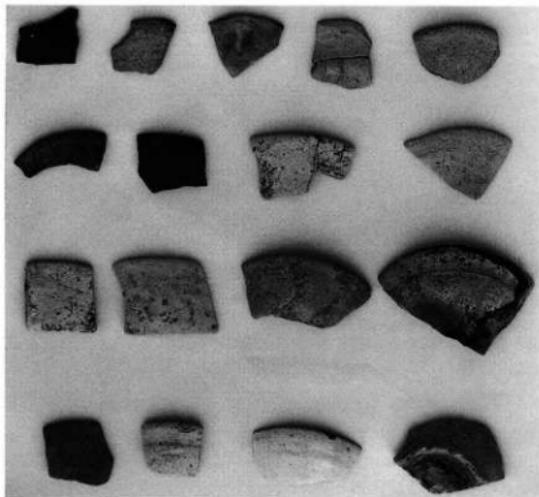
16T中世土器出土状況



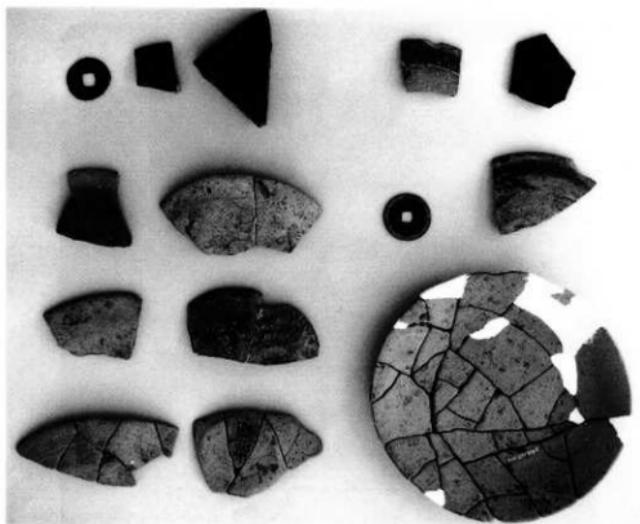
ポンヤシキ地区・オヤシキ地区（7、8T）出土遺物



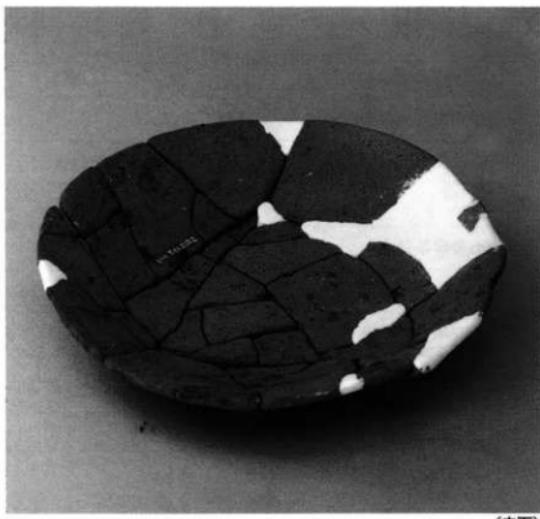
オヤシキ地区（9、10T）・ヒョウタン地区出土遺物



三枚田地区（15、17T）出土遺物

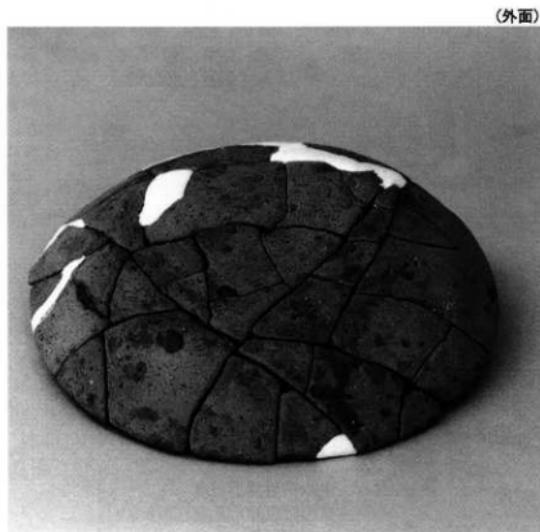


三枚田地区（16T）出土遺物



(内面)

16T（三枚田地区）出土中世土師器皿



(外面)

報告書抄録

ふりがな	まつじょうるいんはくつちょうさむごく
書名	松倉城墳群発掘調査報告Ⅰ
シリーズ名	市内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
編集者名	塩田明弘
編集機関	魚津市教育委員会
所在地	〒937-0066 富山県魚津市北鬼江313-2 TEL 0765-23-1045
発行年月日	西暦2002年3月30日

所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
淋光寺遺跡	富山県魚津市	市町村	遺跡番号	36度 26分 05秒	137度 45分 30・40 秒	20011025～ 20011219	市内遺跡発掘調査事業
鹿熊オヤシキ遺跡	鹿熊	16204 204080 204079				260	

所収遺跡名	主別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
淋光寺遺跡 鹿熊オヤシキ遺跡	寺院 城館	中世	土坑 溝 ピット 石列	珠洲、越前、瀬戸美濃、青磁、白磁、土師器皿、砥石、越中瀬戸、炭化物片	圃場整備の影響は否めないが、地點によって、中世期の遺構が確認できた。また遺跡範囲外においても良好な遺構・遺物の存在を確認した。

平成14年3月30日発行

富山県魚津市

松倉城墳群発掘調査報告Ⅰ

編集・発行 魚津市教育委員会
富山県魚津市北鬼江313-2
印 刷 共栄印刷株式会社

